

第3節

父親の帰宅時刻と
家事・育児参加

父親の帰宅時刻は分散が大きく、「18～19時台」に帰る父親は2割弱いるが、「23～1時台」といった遅い時間帯に帰る者も2割程度いる。帰宅時刻が早いかどうかによって、とくに育児への参加頻度が大きく異なる。早い時間帯に帰る父親は子どもとよくかかわっているが、遅い時間帯に帰る父親は十分なかかわりがもてていない。子どもとのかかわりを増やし、母親の心理的な不安を低減するためには、早めの帰宅が望ましい。

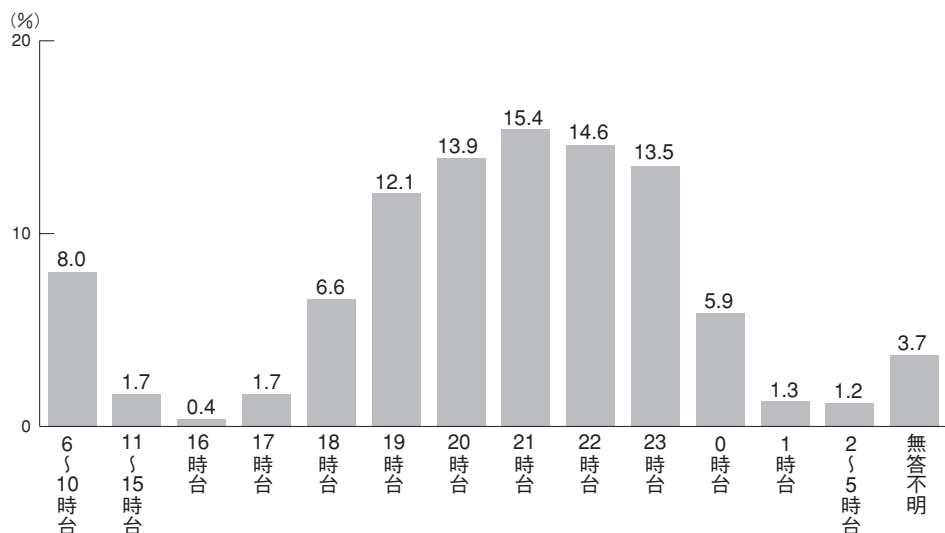
総務省「社会生活基本調査」によると、子どもがいる世帯の夫の1日あたりの労働時間は、1991年から2001年にかけてほとんど変わっていない（1991年7.7時間→1996年7.6時間→2001年7.7時間）。父親の育児参加の重要性が強調されるようになって、労働環境はあまり変わっていない様子がうかがえる。

それでは、父親の働きすぎは、子育てにどのような影響を与えるのだろうか。ここでは、労働時間の長短に関連があると考えられる「帰宅時刻」の違いに注目をして分析していくことにする。

● 帰宅時刻は分散が大きい

まず、父親の帰宅時刻について、今回の調査結果をみてみよう。図3-3-1に示されているように、帰宅時刻は「21時台」をピークとしているが、山はそれほど高くない。「19時台」から「23時台」までは1割台で推移しており、分散が大きいとみることができる。「18時台」から「19時台」といった早い時間帯に帰宅する父親も合わせると2割弱いるが、「23時台」を過ぎて帰宅する父親も2割程度いるといった状況である。

■図3-3-1 父親の帰宅時刻（05年）



注1) 配偶者がいる母親の回答のみ分析。

注2) 0歳6か月～1歳5か月の乳幼児をもつ母親の回答を含む。

(サンプル数 2846人)

それでは、このような帰宅時刻の違いは、なぜ生じるのだろうか。母親の就業状況による違いをみたところ、図3-3-2のようになった。なお、ここでは、勤務時間帯が夜間、深夜、早朝、午前中などと想定される帰宅時刻については省略し、「17時台」から「1時台」までの帰宅時刻の者を図示している。

母親が常勤者の場合は、父親の帰宅時刻のピークは「20時台」である。比較的早い時間帯に山があることがわかる。これに対して、母親が専業主婦の場合は、父親の帰宅時刻のピークは「22時台」となる。常勤者の場合と比較すると、遅い時間帯に山がある。パートタイムは「21時台」と「23時台」にピークがあり、ふたこぶの形になっている。パートタイムの場合、母親自身の帰宅時刻の分散が大きく、短時間の業務に従事して早く帰宅する者と長時間業務や夜間の業務に従事して遅く帰宅する者がいる。こうした母親の帰宅時刻の違いが、父親の帰宅時刻に影響を与えているものと推察される。

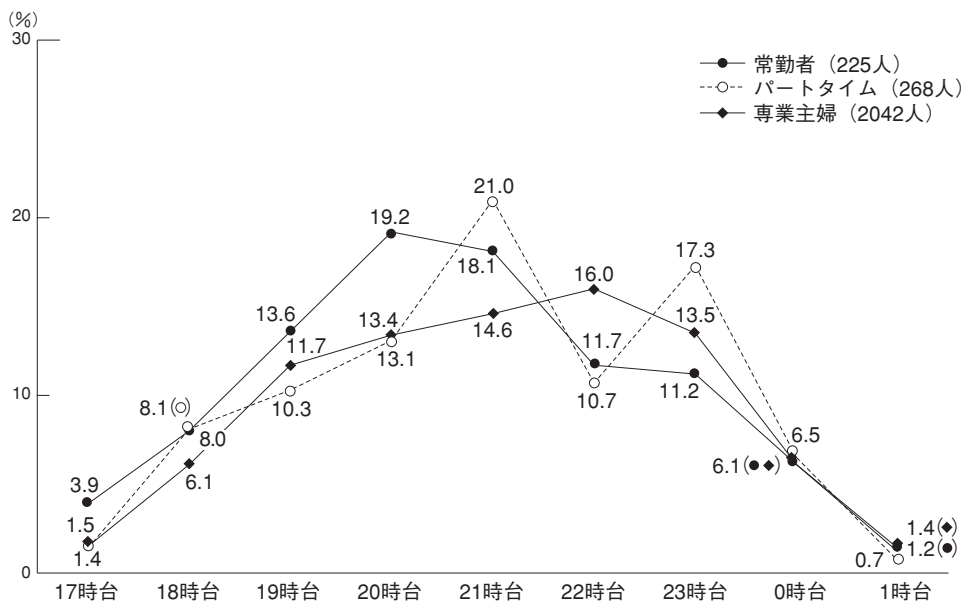
いずれにせよ、母親が仕事をもって帰宅時刻が遅くなると父親の帰宅時刻は早くなり、母親が専業主婦で家庭にいたり、仕事をもっていても帰宅時刻が早かったりすると、父親の帰宅時刻が遅くなる傾向にあるようだ。

● 帰宅時刻が遅いと育児参加が不十分になる

それでは、帰宅時刻の違いは、家事や育児への参加にどのような影響を与えるのであろうか。図3-3-3では、父親の帰宅時間帯別に家事や育児の参加状況を示した。なお、ここでの数値は、「掃除をする」までの上から9項目は「ほとんど毎日する」+「週に3～5回する」割合を、「ごみを出す」「子どもが病気の時、面倒を見る」の2項目は「いつもする」+「ときどきする」割合を用いている。

この図からは、育児に関する項目を中心として、帰宅時間帯により父親の参加状況が大

■図3-3-2 父親の帰宅時刻（母親の就業状況別 05年）



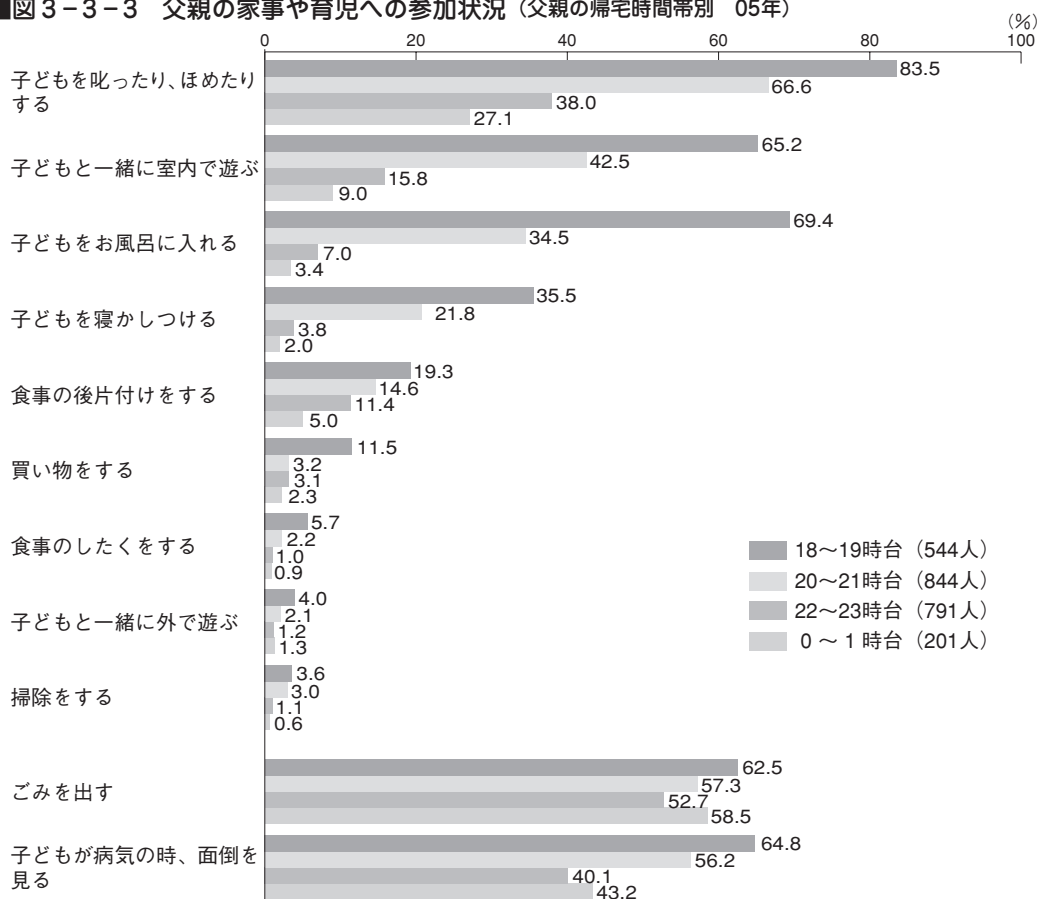
注1) 配偶者がいる母親の回答のみ分析。
 注2) 0歳6か月～1歳5か月の乳幼児をもつ母親の回答を含む。
 注3) 母親の就業状況について「フリー（在宅ワークを含む）」「産休、育休中や休職中」「その他」および無答不明の人は図から省略した。
 注4) 図に示した以外の時間帯については、省略した。

大きく異なることがわかる。「子どもを叱ったり、ほめたりする」は「18～19時台」の帰宅者83.5%に対して「0～1時台」では27.1%と、56.4ポイントも差が開いている。「子どもと一緒に室内で遊ぶ」「子どもをお風呂に入れる」「子どもを寝かしつける」などの項目も、帰宅時間帯による格差が大きい。こうした育児に関連する項目は、家事とは異なり、帰宅時刻が子どもの就寝時刻を過ぎてしまうと、かかわることが不可能になってしまう。大きな格差は、そのために生じるものと考えられる。

先にみたように、父親の育児参加の状況は、母親の心理的な側面にも影響を与え、不安の

少ない子育てをするうえできわめて重要である。しかし、父親の帰宅時刻が遅くなると、育児参加のための時間を確保することが物理的に難しくなってしまう。父親が家事や育児に積極的にかかわり、そのかかわりを通して母親の精神面をサポートすれば、母親が抱える子育ての不安は低減される。そのためにも、父親がある程度仕事をセーブして、早めに帰宅し、子どもと遊んだり、お風呂に入れたりする「かかわりの時間」を確保することが大切であろう。そしてこのことは、母親の育児の質を高め、父親の育児の量を増やすことにつながり、子どもの成長にとってもいい影響を与えるものと考えられる。

■図3-3-3 父親の家事や育児への参加状況（父親の帰宅時間帯別 05年）



注1) 「子どもを叱ったり、ほめたりする」から「掃除をする」までの9項目は、「ほとんど毎日する」＋「週に3～5回する」の%。「ごみを出す」「子どもが病気の時、面倒を見る」の2項目は、「いつもする」＋「ときどきする」の%。
 注2) 「18～19時台」は、父親の帰宅時刻について18時台、もしくは19時台と回答した人。他の時間帯も同様である。4つの時間帯以外を回答した人は、図から省略した。
 注3) 配偶者がいる母親の回答のみ分析。
 注4) 0歳6か月～1歳5か月の乳幼児をもつ母親の回答を含む。